



Title	日本における格狭間の受容と展開
Author(s)	曾布川, 直子
Citation	デザイン理論. 2000, 39, p. 120-121
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/53073">https://doi.org/10.18910/53073</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 日本における格狭間の受容と展開

### 曾布川直子／関西学院大学

#### ●はじめに

7・8世紀、つまり飛鳥から奈良時代にかけての日本は、積極的に文化を受容してきた時代であり、そのような状況を反映して、当時の美術の分野においても大変複雑な展開が見られた時代である。

本発表では、その7・8世紀の大陸文化の受容の特質を示す一指標として、格狭間という台座部分にみられる装飾を取り上げ考察した。請来された格狭間の細部の文様史的考察に加えて、格狭間の意味や、機能を考慮した考察によって、新たに起源や受容の特徴が明らかになった。

#### ●名称について

格狭間とは近世以後の呼称であり、古くは「牙床」「牙象」と呼ばれていたことが『東大寺献物帳』等の文献から確認できる。この語は、従来、「牙」を形象を示す語と捉えて、「牙のような」形の床という意味で理解されてきた。しかし、日本の格狭間にはこの「牙のような」鋭い格狭間は全く見られない。一方、中国の文献には、おそらく「牙床」の起源であろう「牙牀」という語があり、また、「牙のような」鋭い弧線をもつ格狭間がみられる。これはつまり、中国から日本への伝播の際に、名称は伝わったが、何らかの理由で格狭間の形は異なったものが伝わり、日本で独自の認識がされたことが考えられる。

#### ●日本、中国の格狭間

飛鳥・白鳳時代の格狭間は、頂点が繋がっていない「肘木式」格狭間の一種のみであっ

た。これは、格狭間の起源が、台の柱の補強のために付けられた三角副え板であるという説を跡づけるものである。殆どの格狭間は仏像の台座に付随するものであった。そして、更に細部を観察すると「外行弧線」と「内行弧線」に分類ができる。「外行弧線」は、飛鳥時代特有の雲形肘木の曲線に類似する上向きの弧線であり、特に飛鳥・白鳳時代にのみ見られる格狭間である。【玉虫厨子背面腰板彩画】などに見られる。一方、「内行弧線」は、下向きで内側に取り巻く様な弧線を描く。こちらは【法隆寺四十八体仏】をはじめ、比較的多くの例が確認できた。

また、この時代の格狭間の多くに見られる先端の爪先のような特有の形は、従来、中国の北魏・東魏様式の模倣とされてきた。これは時代的に矛盾はないが、北魏・東魏時代の格狭間のもう一つの特徴とされる「西方的」要素、つまりパルメット唐草文が一切見られないのは大変興味深い。つまり、爪先に見られる北魏・東魏形式と、それ以前の、西方的要素の見られる以前の古様の形式が混在するのがこの時代の格狭間の特徴であった。これはおそらく、伝播の際に、朝鮮において様式が停滞的に温存された期間が原因であろう。「外行弧線」にしても、類例は中国よりも朝鮮に見いだされ、飛鳥・白鳳時代の格狭間を考えるに当たっては、朝鮮の影響が強かったと考えられる。

奈良時代にはいると、多様な格狭間の展開が確認できた。前時代に続き、仏像の台座にも格狭間は引き継がれるが、蓮華座や八稜形台座などの隆盛に伴い格狭間は間延びし、前

代の伝統の継承といった感がある。一方で、正倉院宝物においては、格狭間の華やかな展開が見られる。前代から見られる「肘木式」に加えて、頂のつながった「合掌式」、均等に弧線を描く「連弧式」、装飾的な様相の「葉状式」である。正倉院宝物の格狭間は、明らかに装飾的な役割をもち、また、器物に転用されたことは着目すべき点である。前代の仏像の台座から、器物へという展開は外来の展開の受容と捉えられる。

### ●機能から見た格狭間の受容

日本に格狭間が受容された、初期の段階においては、格狭間は仏像の台座に付随したもののが優勢であったが、後に器物に転用されるようになる。これは日本独自の展開ではなく、中国の格狭間の受容によるものである。そこで、格狭間の用いられた場所による意味や機能を考慮して見てゆくと、新たに受容の際の偏りが明らかになった。

中国における格狭間は、勿論、金銅仏などの台座部分にも見られるが、牀という座臥具の脚の装飾にも多く見られる。伝顧愷之の【女史箴図卷】には、この家具の典型的な特徴が描かれる。牀自体は帳に覆われた個室のようなものであり、格狭間をついている。牀は戦国時代頃から見られ、漢代の画像石に多く描かれている。明らかに、主人や身分の高い者の為の座臥具であり、格狭間がセットで描かれている事が多い。しかし、全ての牀に格狭間が付いてたわけではなかった。『南齊書』によると、禁止令の対象となっていることから、格狭間を付ける牀は贅沢なものであったことがわかる。仏像の台座の格狭間はこのような意味が転用され、莊嚴というような意味を持つに至る。そして、時代が下がるにつれて、局や椅子の脚部などに格狭間は見られるが、これらは、牀や仏像の台座の格狭間の

持つ意味が薄れ、脚部の装飾という意味合いが強い。

受容初期の日本においては、初期の仏像の台座に付随した格狭間の意味は理解されていなかったであろう。

では、なぜ、名称は一致するのに対して、格狭間の形式が中国と異なるのかという点であるが、これは、中継点である朝鮮について考えなくてはならない。朝鮮では、中国で見られた様な「牙のような」格狭間は、主に高句麗古墳壁画に描かれた牀の脚部に見られるが、金銅仏の台座の格狭間は、「肘木式」で見られたような、構造的役割を残した古様の格狭間が優勢である。

牀にのみ「牙のような」格狭間が見られ、金銅仏には見られないということは、中国から朝鮮への伝播の段階で、牀と金銅仏の格狭間は別の経緯を経て受容されたのではないだろうか。そして、日本には、牀の現存遺品が未だなく、金銅仏にのみ格狭間が見られた。ここに、日本の格狭間の名称と形の不一致の原因があるのではないだろうか。

### ●まとめ

格狭間の名称と形の不一致という問題は、当時の受容の特徴の一例を示している。

本来の牀に付随する権力の象徴という意味をもつ格狭間、その意味の転用された莊嚴という意味の仏像台座の格狭間、そして、家具・器物につけられた装飾としての格狭間は、中国においては順をおって展開してきたが、伝播の際の様々な経過をへて、日本に受容された形式は、また異なった様相を示していた。

日本の格狭間の名称と形の不一致の問題は、日本に受容される更に前段階の、朝鮮における家具に用いられた格狭間と、仏像の台座に用いられた格狭間の認識の違いによって、引き起こったのではないだろうか。